

「荻窪の記憶」

こぼればなし

月光社の話

このところ、荻窪の町の変遷について、商店街で話を聞く機会が多いのですが、「朝、会社に出かけ、帰るのは夜中」というサラリーマンとは異なり、町が人生の主舞台であるご店主や女将さんたちの話はどれも興味ぶかいものでした。貴重な話をみなさんにご紹介したいと考え、コラムの紙面を借りることにしました。

今回、登場いただくのは、荻窪駅北口、昭和の雰囲気を残す荻窪銀座街にあるレコード店「月光社」の高橋仁さん（90）。現在は、ご子息が店を継いでいますが、中古のレコードやCDが隙間なく棚を埋める店に、しばしば、ご出勤。「お若いですね」と言われると、「当り前だろう。オタマジャクシ食って生きてるんだ」、そんな冗談で応じるそうですが、はじめからオタマジャクシ（音楽）が好物だったわけではありません。

北海道知床出身の仁さんは20歳のとき、地元の鮭を市場を通さず東京で売る事業を起こそうと上京。しかし、地元ばかりか、カムチャッカ沖でも不漁がつついたため、事業を断念。遠い親戚が営む中古レコードを扱う店で、丁稚奉公のような形で働きはじめます。とはいつても、音楽に造詣の深いマニアを相手にした商売。生半可な知識ではつとまりません。

ベートーベンの「運命」さえ知らなかった仁さんは、店番をしながら必死に勉強、常連客からも学びました。やがて、先代が引退すると、店を買い取り、自立しますが、「月光社」の名がマニアに広く知られていたこともあり、商売は順調でした。これまで、店を続けてこられたのは「阿佐ヶ谷でもダメ、西荻でもダメで、荻窪だったから」。それはクラシックを愛好するインテリの層が抜きんでて厚いからだといえます。

大晦日には、店を開放して、一晩中、好きなレコードを聴いてもらうなど、懐に余裕のない若者も大切にしてきました。なかには、レコード会社のクラシック部門に就職した者や、ドイツに留学して大阪のオーケストラの常任指揮者になった人もいます。「母さん死んじゃった。フォーレのミサ曲ください。母さんに聞かせる」と、指揮者志望の少年が泣きながら店に飛び込んできたこともありました。

現在は南口にある名曲喫茶ミニヨンとも深いかかわりがあります。豆腐屋を営んでいたオーナー夫妻に音楽喫茶への転業を勧めたのも仁さん。5,000枚を超えるレコードのコレクションを揃えるのも手伝いました。

1980年代にはCDが登場し、レコードはなくなるといわれましたが、「これは音楽じゃない。音だよ」といい、レコードの文化を守ってきました。

月光社のある「銀座街」は旧青梅街道に面し、かつては荻窪で一番賑やかな通りでした。しかし、いまでは「もっとも廃れた通りになっちゃった」と仁さん。それでも、音楽で荻窪という畑を耕してきた人生を「ちょうどいい時代に青春と壮年を過ごした」と振り返ります。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男



高橋仁さん